

騎士と聞いてあなたが思い浮かべるものは何でしょうか？騎士道？ドラマチックな宮廷恋愛？もしくは迫力あるジョウスト場での競い合いでしょうか。中世ヨーロッパにおいて、騎士は社会の中心とは言わないまでも、重要な位置を占めていたことは言うまでもありません。

この展示では（予算と考証の許す限り）13世紀騎士の格好の再現を試みています。できるだけ文献や当時の絵画、記録を見つけて書きましたが、ほとんどは欧米のリエナクターの研究成果と図鑑、そして学術書ではない書籍から取って来ているので、文章としての信頼性は残念ながらあまり高くありません。話半分で詠んでいただけると幸いです。

#### ① 下着

日本における中世ヨーロッパ（どこを中世とするかについては議論がありますが、とりあえずこう呼んでおきます）というと、抹香臭いカトリック教会の支配だとか、長い「暗黒」時代だとか、とりあえずあまり良いイメージはないと思います。

しかし「野蛮人」といえども下着は着ます。現代よりはるかに洗濯が面倒で大変な労力がいるため、手軽に洗える下着を交換するほうが効率的だからです。

まずはパンツをはきます。イラストを参照して欲しいのですが、これを折り返すことでドロワーズのような形になります。

その次にチュニカ（チュニック）を着ます。チュニカは由緒正しいシャツで、今でもファッション用品として売られています。

次にパンツにホーゼをつけます。現代の女性がつけるタイツとかレギンスに似た外見です。ズボンでない理由は、単純にこの方が歩行時に動きやすいからです。もちろんズボンも存在しており、ズボンを着用することもありました。基本的には摩擦にすぐれたウール製が中心ですが、リネンやコットンの場合もあったようです。

材質の違いはあれ、基本的に平民も王侯貴族もこのような組み合わせ、つまりレギンスとチュニカでした。裕福な者は刺繍にこったり、材質をありふれていたリネンやコットンではなくシルクでしつらえたりしました。

残念ながら、予算の都合ではありません

#### ② ギャンベソン（詰め物入り服）/gambeson

詰め物をした服です。これを着用することにより、ある程度の斬撃、打撃を防ぐ事ができます。裕福でない兵士、騎士は下着の上にこれのみを着用することがありました。カロリング朝時代から続く息の長い装備です。13世紀に大きく広まりました。

アケトンと呼ばれる事もあり、見た感じだと薄いものをアケトン、厚みのあるものをギャンブソンと呼称しているようです。鎧の下にも、鎧の上にも着用しました。

### ③ ホバーク/hauberk

日本語で言うと鎖帷子、くさりかたびらとなります。11世紀、イングランドを征服したノルマン・コンクエスト時代の騎士は、①, ②, ③に兜を身につけていました。手の先までを覆う事ができ、かなりの割合の斬撃を防ぐ事ができます。ノルマン・コンクエスト時代の騎士はまだ軽騎兵的な扱い、というより騎士の間に共通の社会通念がなく、それぞれ勝手に突撃したり、王の命令を聞かなかつたりするために共同して突撃することができず、馬上から投槍を投げつけ、接近戦になったら短い剣か槍で戦っていた事がバイユー・タペストリーから伺えます。詳しい説明は省きますが、騎士社会への教会の進出や、封建制度の発達などにより、ヨーロッパの騎士は重戦車のような存在となり、馬に乗り、がちがちに鎧で固め、密集隊形で敵を蹴散らすことを主戦術になっていきました。しかし中東のエルサレムを奪回することを目的とした十字軍のため東方で戦う事が増え、長い旅路で不運な騎士は馬を失い、徒歩で戦うことを強いられました。裾の長いホバークは馬上では便利でしたが、徒歩戦闘ではジャマになり、したがって裾はどんどん短くなっていきました。

ホバークは、複雑な見た目に反して板金鎧（ローマ軍のセンチリオン兵士が身につけていたロリカ・セメングタタを想像してください）よりも技術的には簡単に作る事ができ、安価でした。

板金鎧が作られなくなった理由は、ローマ帝国が崩壊して技術的に退化したこと、板金鎧が高価だったことなどが挙げられますが、鎖帷子はさまざまな面で当時の板金鎧に優れていたもので、末期のローマ帝国もロリカ・ハマタと呼ばれる鎖帷子を着ていました。

13世紀の東方への十字軍には、装備を整えたり旅費をそろえたりすると、平均的な騎士の年収の二倍のお金がかかりました。現代のアップークラスの年収がだいたい1000万くらいだとすると、ざっと2000万程度の旅費がかかることとなります。spaceX計画というテスラ社社長のイーロン・マスクが提案している火星旅行計画の旅費が20万ドルらしいので、これに匹敵する額となります。

かなり大雑把な計算でしたが、単純に年収の二倍のお金がかかる事業だと考えると馬や鎧の高価さがわかると思います。

ギース夫妻という夫婦で歴史家だった人がいるのですが、妻のフランシス・ギース（2013年、98歳まで存命でした）の計算によると13世紀前半のジェノヴァでは兜ひとつが16～32シリング、ホバークは120～152シリング、ひとそろえ作ると約200シリング、金800グラムと同等の値段がしたようです。現代の価値に直すと450万円くらいですが、金が人力で掘り出されていた時代なのでもっと価値は高かったと推察されます。

大分話がそれてしまいましたが、2002年にアフガニスタンに派遣されたアメリカ海兵隊員と比較してみましよう。PASGETヘルメット322ドル。戦闘服67.65ドル。IMTVアーマー1,620ドル。核、生物、化学兵器への防護服341.75ドル、無線機578ドル。戦闘半長靴105ドル。ライフル586ドル。リュックサック1,031.15ドル。1日3食19.25ドル。標準

給料 1 日 50.59 ドル。戦闘手当で 1 日 5 ドル。

よって、この米兵の合計小売価格は 4,726.39 ドルとなります。これに 2002 年当時の一ドル=134 円をかけてみましょう。ざっと 63 万円です。自衛隊は個人装備の値段が発表されています。それによると、だいたい一人の自衛官を完全武装させるのに必要な額は 50 万円、個人用の暗視装置も 87 万円程度です。新華社通信の 2014 年の報道によると、人民解放軍兵士一人当たりの装備の値段は「iphone6 二台分」(約 14 万円)です。それと比較すると、当時の鎧がどれだけ高価なものだったか推測できると思います。

実際に 13 世紀になっても、騎士見習いである従士や従卒のみならず、まだ旧式のホバークやギャンベソンのみを装備した貧乏な騎士もたくさんいました。これが 14, 15 世紀になると技術の発展で次第に板金鎧が中心となっていくのですが、それでもなお高価だった板金鎧を身に着けられるのは少数の裕福な騎士、傭兵、自由民くらいのもので、遠隔射撃部隊、すなわちクロスボウや弓などを投射する部隊は鎖帷子が中心であり、場合によっては鎧兜を身につけないことすらありました。

残念ながら、予算の関係で歴史的には正しくない鎖帷子を展示しています。細かい点を挙げるときりがありませんが、一番大きいのは材質とリングの留め方です。展示してあるものはアルミ線を曲げてわかにかにしていますが、歴史的にただしものにするためには、鉄線を曲げてわかのかの端をリベットで留めるべきです。こうすることによって非常に強度が増します。

#### ④ 兜/great helm

11 世紀はセルヴェリエ (Cervelliere、スカルクアップとも) と呼ばれる頭蓋のみを覆う簡単なヘルメットでした。これがだんだんと進化していき、顔全体を覆うものとなりました。この展示では、13 世紀から 14 世紀にかけて流行したグレートヘルムと呼ばれるバケツのようなヘルメットを使用しています。このような兜の登場は明らかに板金技術が上がったことを示しています。

もちろん、貧乏な騎士はスカルクアップか、ネイザルヘルムと呼ばれる鼻柱を保護するヘルメットを着用していました。グレートヘルムだと視界が狭く声がかくぐもるので、あえてこちらを身に着ける裕福な騎士もいたようです。

「中世騎士」で思い浮かべるバイザーつきヘルメットはバシネットと呼びますが、それが登場するのは 13 世紀後半のイタリアでした。記録では 1281 年にはじめて歩兵が装備しはじめています。

この展示も、本来であれば enclosed helmet と呼ばれた 12 世紀から 13 世紀にかけて流行したものを使用したほうがより「一般的」なのですが、予算と見栄えの都合上グレートヘルムにしています。Heinrich von Veldekes が 1215 年に描いた「Ritter vor dem Kampf und

ein Zweikampf zu Pferde、戦いの前の騎士と馬上の決闘」という挿絵には enclosed helmet を着用した騎士が描かれています。

Maciejowski Bible、別名十字軍聖書と呼ばれる 1250 年から 90 年に描かれたとされる聖書の挿絵を参照すると、やはり enclosed helmet のほうが当時のものに形がちかく、グレートヘルム（バケツ兜）も皆無ではなかったでしょうが、この形が多く見られるようになったのは 14 世紀のことです。敵の馬上槍突撃を滑らせることによってはじくために、尖った形になりました。てっぺんが尖った形のは、欧州の愛好家からは通称シュガーロフヘルメットと呼ばれています。これは完全に 14 世紀のものなので、本来はもっと原始的なタイプに置き換えるべきですが、見栄えを優先しました。

#### ⑤ コイフ/coif

裕福な騎士であれば頭にコイフを被り、その上にメイルコイフ、そして兜を被りました。そうでなくても兜を着用する場合は大抵コイフを被ります。これがクッションとインナーの役割をします。そのままかぶると単純に痛いのと、打撃系の攻撃を受けたときに傷だらけになってしまうからです。

ちなみに、中国の鎧でもコイフを兜の下に被ります。面白いことに日本の兜では被りません。

#### ⑥ ショウス/Chausses

要は鎖帷子の靴下です。11 世紀から物自体は存在しており、例えばノルマン・コンクエストの一大決戦であるヘイスティングスの戦い(1066)において、ウィリアム一世（征服王）と腹心たちがこれを着用しています。バイユー・タペストリーを見ると、このころはまだ一般兵はおろか、騎士もシャウスを身につけていなかった事が伺えます。1200 年近くになるとほぼすべての騎士が着用するようになりました。

盾ははじめ大きく縦長をしていましたが、時代が下るごとに小型化していきました。これはシャウスのおかげで足を防御する必要がなくなったからです。

完全武装でも股間の守りが薄くないか？と思われるでしょうが、実際に当時も薄いと思われており、15 世紀までは急所として扱われていました。これを逆手に取ったのが 15 世紀末期から活躍したドイツ傭兵のランツクネヒトで、非常に軽装で飾りの沢山ついた派手な衣服を着て、股間を強調する下着を身につけ、恐れ知らずだということをアピールしました。

14 世紀になると板金技術の発展で、鎧は板金鎧となり、鎖帷子は稼動部分を保護する補助的な存在となりました。ショウスは金属プレートによるプロテクターに取って変わられ、姿を消していきました。15 世紀には、我々が「中世ヨーロッパ」で想像するような全身ピカピカの板金鎧で保護され、ベサギューを脇に吊り下げ、ゴルゲットを首から下げ、尖った鉄製のブーツを履くスタイルになりました。こうなると隙間から刺殺するかクロスボウで

貫くかくらいしか有効な倒し方がなく、装甲馬に乗ればまさに重戦車と化したので、当時の騎士同士の戦闘術でも足を引っ掛けて倒す、タックルをする、剣をひつつかんで鎧の隙間に突き刺すなどが主流でした。鎧の衰退はこのあと鉄砲が現れたことから始まっていきます。

また、大きな槍を携えた平民や貧民の集団、もしくは歩兵が数を保って集団で立ち向かえば、騎兵突撃や重装甲な騎士を無効化する事ができるようになったのも大きな理由の一つでした。その例としては1315年スイス盟約者同盟対ハプスブルグ家のモルガルテンの戦いや、1314年スコットランド対イングランドのバノックバーンの戦いなどが挙げられます。その他にも13世紀後半～15世紀にイベリア半島出身のアルモガバールという軽装歩兵の傭兵がイタリア、中東などで活躍し、重装備の騎士を手玉に取っていました。最早騎士は戦場の華ではなくなっていき、1272年を最後にエレサレムに対する十字軍も行われなくなり、1291年のアッコン陥落によって中東にあった十字軍都市も無くなりました。

#### ⑦ サーコート/surcoat

東方での戦いで騎士たちも兵士たちも灼けるような太陽と砂漠に苦しみました。その陽射しを少しでも和らげるために考案されたのがサーコートです。この展示では残念ながら予算がなかったので安物のコスプレ衣装用のサーコートを流用していますが、本当であればリネン又はウールでできていたと思われます。

サーコートは敵味方の識別にも便利でした。十字軍に参加するものはすべて肩に十字をつけており、騎士団に書属する者は胸にも十字をつけました。

いささか乱暴な識別ですが、13世紀前半は袖つきで、後半は袖なしになりました。

1250年ごろになるとより裕福な騎士たちは追加の防御のためサーコートの下にコートオブプレートと呼ばれる簡素な鎧を着るようになりました。これは、敵の騎兵の馬上槍突撃に耐える防御を欲したからだとも言われています。ギャンプソンを身につけることもあったようです。

コートオブプレートは布の服に板をはりつけた簡素な構造であったため安価で大量生産が可能であり、1295年にフランスのフィリップ4世が集めた軍団のほとんどの兵士が身につけていました。

#### ⑧ メールコイフ

この展示では着せていませんが、メールコイフを兜の下に被る事があります。

近世くらいまでの宗教画にはよく見られますが、見る人に没入感を与えるため、歴史的人物のイラストにその絵が書かれた当時の服装を着せることがよくありました。国立西洋美術館所蔵のバルトロメオ・マンフレディ「キリストの捕縛」などが好例かもしれません。この作品ではキリストを捕縛する兵士たちが作品の描かれた1610年頃の格好をしています。ちなみに、今に置き換えるとすると、源氏物語や枕草子の挿絵に現代のヒルズ族の服を

着せるようなもの可もれません。

もちろん宗教画とは普遍的な題材であり装備への考証はそれまで重要な要素ではないのですが、これらの絵を見ることによって描かれた当時の兵士・騎士の装備を推察する事ができます。

1150～80年ごろに書かれたウィンチェスター聖書の中の、morgan leaf と呼ばれるジョン・ピアumont・モーガン（19世紀の資本家）によって集められた写本がありますが、その中にイスラエル王のダビデの人生について描かれたイラストがあります。

この絵にはダビデとゴリアテの戦いが描かれていますが、ゴリアテは完全に当時の騎士の格好をしています。すなわちメイルホバークにスカルキャップ、シャウスを身につけ、縦長のカイトシールドを装備、サーコートは身につけていません。カイトシールドはシャウスがすべての騎士によって身につけられるようになり、ギャンベソン・ズボン履き、足の防御がいらなくなった13世紀になると次第に小さくなっていきました。また、サーコートは十字軍が佳境にさしかかった13世紀になると身につけられました。すなわち12世紀は騎士の装備の過渡期だったというわけです。

おそらく1220年ごろに描かれた Arroyo Beatus (Nouv. acq. lat. 2290.) という写本を見てみましょう。フランス国立図書館の Département des manuscrits (写本部門) で見る事ができます。

この本はリエバナのビアトゥースという聖人が8世紀頃に書いた、ヨハネの黙示録の解説本を底本にしているのですが、挿絵に当世風のアレンジが加えられています。その中でも「二人の証人の死」という挿絵を見ると興味深い事がわかります。

挿絵の下段で二人の証人を斬殺している兵士たちは、ひとりが鎖帷子にスカルヘルム、二人目がチュニカにスカルヘルムという軽装、三人目が鎖帷子に革鎧、グレートヘルムを着用しています。全員足には全く武器をつけておらず、盾は当時の新型の、縦長でないシールドです。

Maciejowski Bible、別名十字軍聖書と呼ばれる1250年から90年に描かれたとされる聖書の挿絵を参照してみましょう。この聖書の挿絵は投石器にしがみついた兵士(23ページ)が枠の外に描かれていたり、漫画的な表現が多く見ていて楽しめると思います(もちろん書いた人は荘厳な気持ちで描いたのだと思いますが) ありがたいことにJ・Pモルガン図書館&博物館所蔵で、ネット上に48ページ中43ページ公開されている(43ページはモルガン図書館に、2ページはパリ国立図書館、1ページはロサンゼルスJ.ポールGetty美術館、2ページ欠落)ので、いつでもどこでも鑑賞する事ができます。

## ⑨ 十字軍の部隊構成

少し展示の意図とは外れますが、13世紀の騎士を語るうえで重要なので十字軍について書こうと思います。中世の雑兵は40日間戦争に従事すれば家路につくことができましたが、十字軍は贖罪のため聖地に赴いているという性質上簡単に家に帰るわけには行きませんでした。もちろんむりやり主君に連れてこられた兵士たちもいたでしょうが、ほとんどの兵士たちは自分で志願して十字軍に参加していました。実際、初期の十字軍は妻が反対すれば参加を取りやめても罪に問われませんでした。

第一回十字軍は3万人の規模があり（貧民十字軍をのぞく）、そのうちの6000人が騎士、あとは歩兵だったと言われています。

十字軍の軍事的な中核はまちがいなく宗教騎士団でした。これは聖地にできた、修道生活と軍事的な騎士生活を同時に行なうという性質の団体で、集団行動ができ、規律もあり、長い現地生活で現地にも造詣が深いという強力な存在でした。これ以外にもテュルコポリスもしくはテュルコポリス(τ ο υ ρ κ ό π ο υ λ ο ι)と呼ばれる現地出身の補助兵たちもいました。テュルコポリスは名目上キリスト教徒とされていましたが、ギリシャ人、トルコ人の正教徒、イスラム教徒なども多数混じっていました。ヨーロッパ出身の騎士たちよりも高速な馬に乗り、より軽装備で、主に軽騎兵や弓騎兵として活躍しました。

## ⑩ 漫画・映画とか

この時代を描いたものは少なくありませんが、日本語で見られものであればキングダム・オブ・ヘブン(12世紀後半)、ロビンフッド(12世紀末)、アイアンクラッド(13世紀初頭)あたりが良いと思います。

漫画だと14世紀になってしまいますが、「ホークウッド」「純潔のマリア」「狼の口」、11世紀では「ヴィンランド・サガ」あたりが良いと思われます

## ⑪ どうやって戦っていたのか？

具体的な剣術について記された本を *fechtbuch* と呼びますが、残念ながら最古のもので現存しているものは1300年に書かれた *Royal Armouries Ms. I.33* という論文です。この本は現在イギリスの王室武器博物館に所蔵されており、有り難いことに挿絵つきでネットで現代英語訳が読めますので、興味がある人は読んで見ましょう。またキングダムカム：デリバランスというすばらしいゲームのおまけドキュメンタリーで1時間にもおよび *fechtbuch* について取り上げているので、*steam* のアカウントがある人は買しましょう。

14世紀になると鎧の発展で、単純な斬撃で騎士を倒すことは難しくなりました。板金鎧は刃が通らなかつたためです。そのため、細長い刺殺用の剣や、ハルバード、ウォーハンマーのように敵の守りの薄い部分を突き刺すか、頭を殴って転倒又は昏倒させる武器が流行しました。具体的には手のひら、わきの下、兜のスリット、股間、背中などを狙いました。15世紀になるとこれらの防御上の欠点はかなり改良されるようになったので、組みついて

倒すような白兵戦が行われました。しかしながら、この時代になると騎士は騎士と戦うというより、鉄砲で貫かれたり雑兵に袋叩きにあったりするほうを心配しなければいけなくなっていました。このあたりの事情は侍の具足の発展によって剣術が変化していったのに似ています。

基本的に11世紀以降の騎士は騎乗して馬の突進力を頼みにランスで敵を蹴散らすというものでした。

また、騎士同士の戦いでどちらかが命を落とすのはまれでした。これは社会を構成する人間として、戦いで命を失うにはあまりにも貴重だったこと、そして捕縛すれば身代金が狙えた事、鎧の防御力が強力だったこと、などが挙げられます。

近世になると騎士階級の没落、そして人間が増え、人間の命が安くなっていったので鎧はどんどん小さくなりました。第一次大戦の塹壕戦で近接戦闘に備えて兵士が鎧を着たことを除けば、それ以降鎧が着用される事はまずなくなりました。最近の非常に珍しい例だと、ドイツ警察の一部の州の特殊部隊が、刃物事件が発生した際に鎖帷子を着用することがあります。